

本格的産業化をめざすには、個人的欲望を超えた欲望が必要である

超絶的欲望と社会貢献

食堂業の多くの経営者たちの欲望は、可愛げですこぶる人間的である。たとえば南方の島に高級別荘を造つたり、数ヶ所の不動産を所有しその含み資産が数百億円になったと喜んでみたり、株の投機で儲かったと思つたのがバブルの崩壊で数百億円の損をして悲しんだりと、せいぜいそんなところである。

自分の創業した事業にも個人的欲望にふさわしいビジョンをもっている。自分が現在付き合っているゴルフ仲間や××クラブのリーダーたちに、良い店だと評価されるような店が最高だと思う。

そして経営の自己採点も、個人的欲望を充足できる、個人所得と個人資産が確保できれば足りると考える。

ここまででは、けなしているのではない。どちらかといえばむしろその人間的であることを誉めているのである。

問題はこれからである。ホンネは以上のような志にもかかわらず、幸か不幸か「月刊食堂」のような世界的レベルで通用する食堂業経営を勉強するための雑誌を読んだり、私どものような食堂業の産業化をすすめるコンサルタントの話を聞いたりして、何となく企業規模を大きくできそうだと、実は自分のホンネではしたいとは思ってもいないことをしようとするのが問題なのである。

本格的産業化をめざして企業規模を成長させていくためには、ただごとではない情熱のボルテージの高さが必要なのである。

情熱の大きさは、その人物の持つ志やビジョンへの欲望の大きさ、高さによって決まる。その欲望の大きさは、冒頭に上げた個人的欲望の大きさにほぼ正比例する。

産業化の旗手としての企業化を志すなら超絶的情熱が必要で、その超絶的情熱のためには、超絶的

欲望が必要なのである。そこは、可愛らしい人間的欲望の世界ではないのである。

超絶的とは、人間と断絶してそれを超えているということである。それをわたしは、悪魔的という。

悪魔的欲望なんていうと凡人は、単純に極悪非道な地獄の世界に住む人間像を想定する。だが、悪魔は神に似る。同じく人間を超絶していることよって、悪魔と神とは人間の目からは区別がつかないくらい似ているのである。

わたしは、ヨーロッパの中世以来の都市にかならずあるローマカトリックの大聖堂を見るたびに思う。そこには神性と悪魔性が並存している。時の権力を握る王や貴族たちが百年単位の歳月をかけて建立した大聖堂には、全ヨーロッパから集められた建築家や彫刻家や画家たちの畢生の大傑作がキリストを賛美しており、その荘厳さに圧倒される。そこに投じられた富の源泉は、農奴や普通の市民からの搾取によつたに違いなく、それは、王侯貴族たちの紛れもない悪魔的所行なのである。

彼らの悪魔的欲望は、大聖堂の建立によつて神性化されたのであ

る。

このように何か人間がこの世に大きなものを残そうとすると、その残そうとするものの大きさに比例して大きな欲望を持たなければ、神聖な欲望も実現できないのである。

神聖な志には悪魔的志が同じ高さで必要なのである。

人間のやることは、物理で習ったエネルギー不変の法則の範囲をでない。一方で何か善きことが起ると片一方では何か悪しきことが発生し、善きことと悪しきことの量は、どのようにひっくり返っても同じである。

産業社会の中の企業の存在理由は、社会貢献にあるといわれる。食堂業にとつて社会貢献とは、我が提供する食べ物に満足してくれた再来客の日常生活をより豊かにより快適にすることである。店数を増やすのもそのためである。勇敢に悪をおかそう。そして勇敢に善きことに大きく挑戦しよう。